

◇特集 北米文学における核の表象について

# 特集 「北米文学における核の表象について」 報告

高野 吾朗

福岡を拠点に発足した「原爆文学研究会」は、その日から今に至るおよそ十年の間、多種多様な顔ぶれとともに、様々な「原爆文学」作品および「原爆」関連の史実へと考察の光を当て続けてきた。だが、どちらかというところ、当研究会がこれまで志向してきた「原爆文学」探求の方向性は、日本「国内」の文化・文学状況の探求へと大きく傾きがちであった。そうした探求の重要性が依然として存在し続けているその一方で、「国外」における「原爆」や「核」への視線の探求についても、同じくよりいっそうの深まりが求められる時代にどうやらなってきたように思われる。多文化的かつ複眼的な研究姿勢がこれまで以上に強く求められるのは、他の分野同様、「原爆文学」研究の分野においてもまた然りなのである。その一里塚として、今年七月八日（日曜日）、当研究会は「北米文学における核の表象について」と題した新たなワークショップを開催した（開催地は広島大学・東千田キャンパス）。北米文学研究者三名からの話題提供を議論の足がかりにしつつ、北米圏ならではの原爆（および核問題）と文学との関わりあいを探ってみようとしたのである。参加者は関東・関西・九州の研究

者たちを併せ、およそ三十名ほどであったが、約四時間に及んだ討議は、当初の予想をはるかに超えて非常に白熱したものとなった。

まずはマイケル・ゴーマン氏（広島市立大学准教授）から、アメリカ文学において代表的と思われるいくつかの「核物語」に関する概説が行われた。ここで主に挙げたのは、ジョン・ハーシー（『ヒロシマ』）、コーマック・マッカーシー（『ザ・ロード』）、ティム・オブライエン（『ニュークリア・エイジ』）、カート・ヴォネガット（『猫のゆりかご』）、レイチエル・カーソン（『沈黙の春』）といった名だたる作家たちであった。これら「核物語」を考察する際のキーワードとしてゴーマン氏がとりわけ注目したのは、冷戦心理がもたらした「核の不安」という独特の意識であった。核による破壊を書く前に、核がもたらす不安感をなによりまず描こうとしたその姿勢こそ、従来の北米「核」文学の際立った特徴の一つなのかもしれない。これに対し、「核への怒り」が主要テーマとして浮上することは全くなかったのか——といった点が議論となった。ゴーマン氏からは、「怒り」を前面に押し出す文学作品は、アメリカではなかなか売れない」「怒り」をいかにオブライトに包んで提示するかが重要視されている」といった指摘があった。

続いて松永京子氏（神戸市外国語大学准教授）から、ネイティブ・アメリカン（アコマ・ブエプロ部族）の血を引くサイモン・Ｊ・オーティーズ（一九四一〜）という詩人の作品群が紹介された。核実験用ウラン二ウム採掘の仕事に従事する先住民の人々の苛酷な実態を、オーティーズは自らの詩作を通じ、今なお広く世間に訴えかけようとして続けている。自分らが鉱山から掘り出したものが



の仕事に関しても、様々な点が討議された。「どうして『口語自由詩』なのか」「白人文学ならではの定型詩の伝統に対する、一種の抵抗か」といった、いわば「文体」の問題。「彼の詩には、ネイティブ・アメリカンと他の非白人系の人々との人種を超えた交流が時おり見受けられるが、ここに伝統的なアメリカの核言説を転覆させるだけの素地が見えやしないか」といった問題提起も行われたし、「核実験場や核燃料施設は世界中に散在しているわ

最終的にどんなことに使われるのか、いまだによく知らぬまま、ひたすら肉体を酷使して働き続けるアメリカ南西部の先住民たち。白人資本家たちに経済的に搾取され続け、組織的な抵抗もなかなかできぬまま、ひたすら沈黙を守り続けていく、こうした人々々の複雑な思いが、オーティーズの詩にはあふれている。この詩人

けで、ここにもまたある種の『多文化にまたがる世界的な文学テーマ』が存在しているのではなからうか」といった声も聞かれた。最後に登壇した松尾直美氏（福岡大学非常勤講師）からは、カナダの日系二世作家ジョイ・コガワ（一九三五〜）の長編小説『Obasan』のテキスト分析が披露された。第二次大戦中のカナダにおける日系人の強制収容問題を題材にしたこの小説は、一九八一年の発表当初から大きな反響を呼びおこし、北米の名だたる文学賞をいくつつか受賞している。この作品の最後に、なぜかふいに「ナガサキの原爆」が登場するのである。「日系人の強制収容物語に、なぜ原爆が絡まねばならなかったのか」——この謎に迫ろうとした松尾氏の発表を聞きながら、わたしが個人的に考えたこと、それは、『核についてのみ』の核物語は、時代を超えて読み継がれていくだけの文学性をなかなか持ちにくいものではあるまいか」といった素朴な疑問であった。核の恐怖や核の不安といった問題が、単にそれだけにとどまらず、環境問題や国際政治や国内政治や「核」以前の戦争といった別問題へと広がっていき、初めてそこにただならぬ普遍性と永遠性が顕現してくるようには思われはじめたのである。海外の核言説や核文学を考えると、日本国内のみに閉じられてきた我々自身の言葉をあらたに見直す作業、あるいは、核や原爆の問題を世界中の人たちや出来事とつなげていく大切な作業でもあるのだ。我々はそれをゆめゆめ忘れてはならないのである。

**付記** 本稿は『西日本新聞』（二〇一二年八月一三日）掲載の拙稿（原

題「原爆」「核」文学の普遍性）を特集の報告として、若干の修正のうえ、転載するものである。